

私の「幸福の場」

慶應義塾大学大学院国際取引法・民事法学専攻

セレナ、フランコ

日本に初めて足を踏み込んでから何年も経ったが、今でもその頃のことを忘れることができない。当時はホームステイしながら日本で生活していた。出発前は日本に行くことが楽しみで仕方なかったが、日本に住み着いてからすぐ様々な壁にぶつかって落ち込む日々が始まった。そして、その気持ちの処理方法がわからなくて、ホームステイ先の寝室で眠りにつくと母国にいる夢を見ていたことを今でも鮮明に覚えている。それから長い年月が経過して、私は今も日本に住んでいる。初めて日本に来た私に会うことができれば、「慣れてくるものさ、なんとかなるよ」と励ましの言葉をかけてあげたい。いや、それだけではない。何よりも一つの助言を与えたい。それは、「これさえあればちょっと幸せだなと思える『幸福の場』を常に心の中にもっていたほうがいいよ」ということである。

日本文化と日本語に触れ始めたのは、小さいときから興味があったのではなく、単に家族に逆らうためだった。私は小学校の時から高校までは家族の期待に応えるためだけに勉学に励んでいて、学問に関してはこれを知りたいという好奇心がほとんどなく、学校の課題に漫然と取り組んでいた。だが、反抗期というのは誰にでも訪れるものである。私の場合はそれが大学1年生の時だった。当時は家族の期待を押し切ってでも自分の意思を貫きたいという考えに捕らわれていた。だから、日本語と日本文化に関心が全くなかったにも拘わらず、家族の反対に耳を傾けることなく、大学で日本語と日本文化を勉強しようと思った。しかし、ついに日本にやって来た時、日本のことを学ぶ動機が家族に反対することにすぎなくて、日本の言葉と日本の文化を学んできたのにその学習には心を込めたことがなかったことに気づいた。特に日本文化に対する理解を示そうとしても、誤解されることがほとんどで、大学で学んできたことを虚しく感じていた。落胆して自国に帰ることばかり考えていた。

その私を救ってくれたのは当時の日本語の先生だった。その先生は日本の伝統芸能の知識が豊富で、特に歌舞伎に精通していた。ある日、落ち込んでいる私を見て、歌舞伎を観てみないかと誘ってくれた。当時の私は何に対してもマイナス思考で、歌舞伎に対しては堅苦しい、わかりづらいという印象しかなく、わざわざ銀座まで歌舞伎を見に行く気は微塵もなかった。それでも、お誘いを断るのが得意でなかったのも、不本位ながらその先生のお誘いを受けることになったのだった。

歌舞伎座へ入った瞬間に、歌舞伎の世界は私が思っていたのとは別物だということに気づいた。公演の前に顧客が売店を見て回ったり、演目の概要を読んだりしながら賑やかにおしゃべりをしていた。なんか、楽しそうだなと薄々思い始めた。そして、公演が始まった。歌舞伎は動きが少なく、聞き慣れない日本語で延々と演技し続けるものかと思ったら、躍動感のある場面も多かった。また、動きは少なくともそれぞれ美しく、少ないからこそ感情であふれている。気が付

くと、歌舞伎役者の鍛錬された動きと美しい台詞に魅了されている私が出た。そして、あっという間に5時間が経っていた。

公演が終わった時、ちょっとした幸福感に包まれていた。その時初めて、このように日常生活を忘れることができる「幸福の場」、歌舞伎がある日本をもっと理解したいと「心から」思った。そこから、私の日本の見方はがらりと変わった。多くの壁にぶつかってつらい思いをしたとしても、自分だけの「幸福の場」があると何でも乗り越えられると思えるようになった。誤解されることがあったとしても、それをばねにしてどうやってこの誤解が解けるかに力を注ぐことにした。歌舞伎はいわば日本の生活において私を救ったといっても過言ではない。

この経験から、昔の自分に会えばこんなことをいいたい。何かをやり始めるきっかけは様々な形で巡り合える。その中には、興味がわいてきて掴んだきっかけもあれば、偶然に現れるきっかけもある。そして、あるきっかけを掴めば、それで人生の新たな道が開かれる。時には自分には合わない道を選ぶこともあるし、あるきっかけを掴んだらその道を必ず歩み続けたいといけないというわけでもない。それでも、ある道を歩んでいる間に「幸福の場」を見つけることができ、それがあからこその道を歩み続けたいと思っているのであれば、間違った道ではないかもしれない、と。